

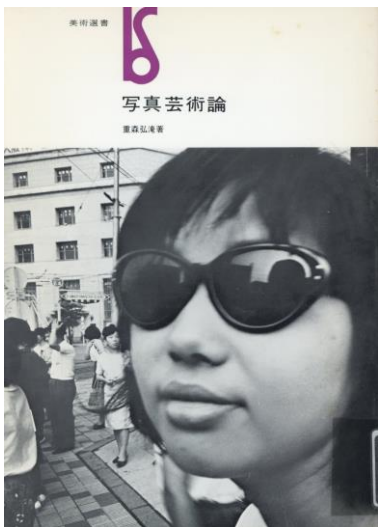
日本カメラ博物館 JCII ライブラリー  
学芸員 宮崎真二

しげもりこうえん

重森弘淹（1926-1992）は、同志社大学文学部を経て、月刊誌『いけばな芸術』を創刊して編集長に就任します。1955年頃から写真評論の道に進み、1959年に細江英公、東松照明、奈良原一高らが結成した写真家集団の「VIVO」や、ウィリアム・クライン、ロバート・フランクら海外作家の紹介と評価など先鋭的な評論活動を行います。また、写真批評活動の延長として、1958年に「東京フォトスクール」（現：東京総合写真専門学校）を設立しました。理事長兼校長という役職に加え、自らも教授として「バウハウス」を目標とした少数徹底教育を行いました。ほかにも多摩美術大学などで講師のほか、1990年には武蔵野美術大学映像学科の設立に伴い教授に就任するなど、多くの写真家育成に尽力しました。



『写真批評』創刊号



『写真芸術論』

1950年代末から1980年代中頃にかけて、主要写真雑誌にてほぼ毎号のように時評記事などを執筆しています。また1973年4月には、東京総合写真専門学校出版局から隔月刊誌『写真批評』を創刊しました。刊行にあたり重森は「写真創造の地平に、新たな批評風土を確立するためになくはならぬもの」（創刊号・編集者私記）と述べています。

著書は、『写真芸術論』（美術出版社・1967年）、『写真の思想』（潮出版社・1972年）、『カメラ・アイ、転形期の現代写真』（日貿出版社・1974年）など、雑誌での歴大な執筆実績と比較すると数は多くありませんが、「著書はすべて書き下ろしで発表したい、というのが自らに課してきた宿題」（『カメラ・アイ』あとがき）としていたことが特筆されます。

但し初期の著作となる『世界の写真家』（ダヴィッド社・1965年）は、『写真サロン』1959年3月号から25回にわたって連載された「世界写真家物語」を基に、写真家3名の解説などを追加して再構成したものです。また、没後に刊行された『名作で辿る世界の写真史』（毎日新聞社・1993年）は、小西六写真工業の愛用者クラブ会報『フォトファミリー』（後の『フォトユニカ』）1986年1月号から1990年12月号まで全60回連載された「名作鑑賞」から50点を収録し、年代順に再構成したものです。本書には遺稿となった論考「写真の歩み」を収録しています。

このほかには『現代日本写真全集』（創元社・1958年～）、『日本写真全集』（小学館・1985年～）など、写真全集の企画・編集に数多く携わり、歴史上の写真家たちが創作過程で辿ってきた試行錯誤の道程を通して、写真表現の基礎となる理論と方法論を導き出すための提起を行いました。